

第27回特別展

# 水辺びくらす

さらくじゆりいせき  
—讃良郡糸里遺跡の発掘調査から—

四條畷市立歴史民俗資料館



## ごあいさつ



讃良郡条里遺跡は、四條畷市と寝屋川市にまたがって広がる、縄文時代から江戸時代まで続く遺跡です。遺跡の周辺では、東側に生駒山系が南北に横たわっています。古代には、遺跡の西側に河内湾（湖）が広がり、山系から幾筋もの川が注ぎ込んでいました。遺跡の東1kmの位置には古墳時代前期の前方後円墳である忍岡古墳があり、遺跡の南側は古墳時代中期から後期の渡来系馬飼い集落である葎屋北遺跡です。このように、この遺跡は恵まれた自然環境・歴史的環境の中に位置しています。

四條畷市教育委員会では、寝屋川市教育委員会、(公財)大阪府文化財センターと合同で、平成23(2011)年8月から、大型店舗建設に伴って讃良郡条里遺跡の発掘調査を行っています。発掘調査は平成24(2012)年12月までを予定していて、これまでに多くのことがわかってきました。今回の特別展では、発掘調査中の速報資料をいち早く展示します。2000年以上前から現在に至るまで途切れることなく続いてきた、水辺でくらす人々の営みを、出土したばかりの速報資料から肌で感じていただければと思います。

最後になりましたが、本展の開催にあたり、多くの方々にご協力いただきました。厚く御礼申し上げます。

\*この冊子に書いてある数値はすべて速報値であり、その後の研究により若干の修正がなされる場合があります。

### お世話になった方々

大阪府教育委員会、寝屋川市教育委員会、(公財)大阪府文化財センター、(独)国立文化財機構奈良文化財研究所、畷古文化研究保存会、(株)島田組、瀬川芳則、櫻井敬夫、光谷拓実、深澤芳樹、杉山 洋、渡邊昌宏、森屋直樹、山上 弘、岡本敏行、竹原伸次、岩瀬 透、松岡良憲、宮崎泰史、井西貴子、岡田 賢、塩山則之、濱田延充、田邊征夫、岡本茂史、岡戸哲紀、森屋美佐子、後川恵太郎、下村晴文、中西克宏、福永信雄。(順不同・敬称略)

### 参考文献

杉山洋2003『唐式鏡の研究』鶴山堂出版部。四條畷市役所1972『四條畷市史』第一巻。  
四條畷市教育委員会2006『こども歴史 わたしたちの四條畷』。四條畷市教育委員会2010『歴史とみどりのまち ふるさと四條畷』。

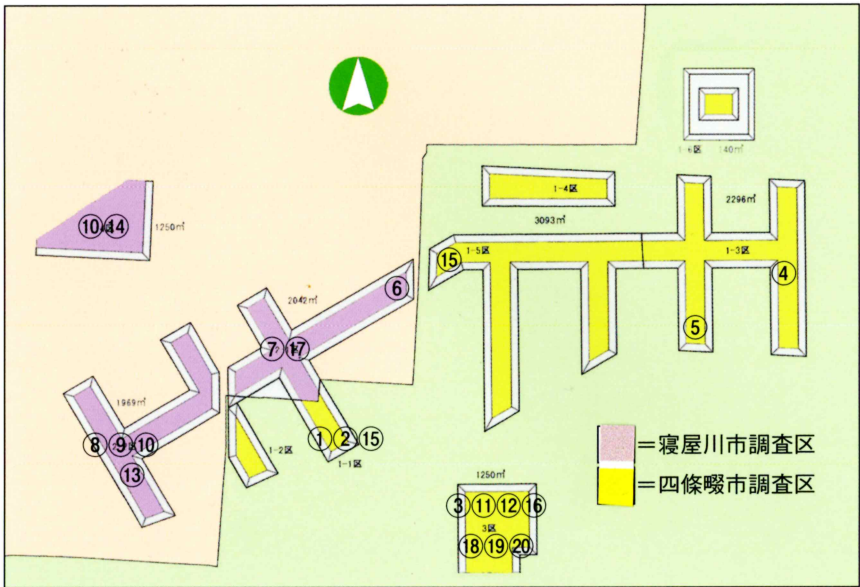
四條畷市教育委員会

四條畷市立歴史民俗資料館 指定管理者 株式会社日立ビルシステム

大阪府四條畷市塚脇町3-7

平成24(2012)年10月10日(水)~12月16日(日)

# 目次



遺跡調査区配置図…………… 2  
 讚良郡条里遺跡の航空写真…………… 3～4

① 弥生時代前期 水田跡…………… 5  
 ② 弥生時代中期 水田跡…………… 6  
 ③ 弥生時代中期 集落跡…………… 7  
 ④ 弥生時代後期 集落跡…………… 8  
 ⑤ 古墳時代前期 集落跡…………… 9  
 ⑥ 古墳時代中期 祭祀の後片付け…………… 11～12  
 ⑦ 古墳時代中期～後期 井戸…………… 13  
 ⑧ 古墳時代中期～後期 船をリサイクル…………… 14  
 ⑨ 古墳時代中期 製塩土器…………… 15  
 ⑩ 古墳時代中期～後期 玉類…………… 16  
 ⑪ 古墳時代中期～後期 水田跡…………… 17  
 ⑫ 古墳時代後期 水田跡…………… 18  
 ⑬ 古墳時代後期 竪穴住居跡…………… 19  
 ⑭ 古墳時代後期 掘立柱建物跡…………… 20  
 ⑮ 飛鳥～奈良時代 鏡の祭祀…………… 21～22  
 ⑯ 平安時代 銅銭を使うお祭り…………… 23～24  
 ⑰ 平安時代 水田跡…………… 25  
 ⑱ 平安～鎌倉時代 集落跡…………… 26  
 ⑲ 平安～鎌倉時代 井戸4基…………… 27  
 ⑳ 鎌倉～室町時代 井戸2基…………… 28  
 ㉑ 讚良郡条里遺跡のその後…………… 29  
 ㉒ そして現代へ…………… 30



- 讚良郡条里遺跡調査地 ● 大將軍社跡
- 忍岡古墳・忍陵神社 ○ 大阪ガスタンク
- 都屋北遺跡 (なわて水みらいセンター)

## 《この冊子で取り扱う時代一覧》

弥生時代前期	飛鳥時代
弥生時代中期	奈良時代
弥生時代後期	平安時代
古墳時代前期	鎌倉時代
古墳時代中期	室町時代
古墳時代後期	

讚良郡条里遺跡の航空写真

(赤線内が調査地)



奈良時代以来、この地域は讚良郡と呼ばれてきました。讚良郡とは、現在の四條畷市を中心に、寝屋川市と大東市の一部にまたがる地域のことです。

条里制とは、奈良時代から平安時代にかけて施行された土地を東西南北に区画する制度のことです。一辺約109m(二町)で正方形に区画する制度です。

讚良郡条里遺跡は、この条里制の区画が現代まで残ってきた場所です。





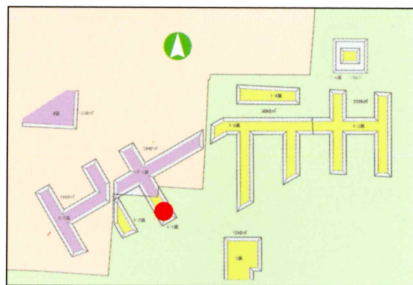
## 弥生時代前期 水田跡 海拔0.5m



- 水田の跡 1区画約10㎡～18㎡ 四條畷市では、弥生時代前期から後期の集落は発見されていますが、前期の水田が見つかったのは初めてのことで、貴重な調査結果が得られました。



水田跡から見つかった、稲を収穫する石庖丁  
長さ15.7cm



今回の調査地に最初に人が住み始めたのは、弥生時代の前期、およそ2500年前のことでした。弥生時代前期の人々は、一辺3.5mほどの小さな水田で稲作を営んでいたことが分かりました。まだ大区画の水田を水平にして導水する土木技術がなかったのかもしれませんが、水田からは、石庖丁も見つかっています。当時の人が使っている途中に落としてしまったのでしょうか。

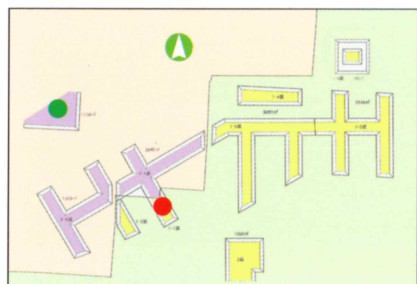
讚良郡条里遺跡の第二京阪道路部分の発掘調査では、これより古い近畿地方最古と言われる弥生土器や炭化米も見つかっていますが、水田は見つかっていませんでした。今回このように水田が見つかったことで、弥生時代前期の水田の様子がわかりました。



## 弥生時代中期 水田跡 海拔0.6m



●水田の跡 1区画の大きさ約58㎡～110㎡ この水田の下の面は左  
図の水田です



●稲を収穫する石庖丁 長さ10.6cm

弥生時代中期になると、遺跡に住んでいた人々はそれまでより大きな区画の水田を作り、稲作を営むようになりました。この水田は、前期の水田よりもアゼがしっかりしていて、土木技術の進歩がうかがえます。水田を作るための知識も蓄積し、道具にも工夫を重ね、大規模な水田を作ることができるようになったのでしょうか。水田から少し離れた場所からは石庖丁が見つかっています。

このように大規模な水田は、人々の生活の基盤となったことは確かでしょう。讚良郡条里遺跡は、人々の生活の根本を支える米の生産地として、2000年以上も人々が暮らし続けた場所であったと考えられます。



## 弥生時代中期 集落跡

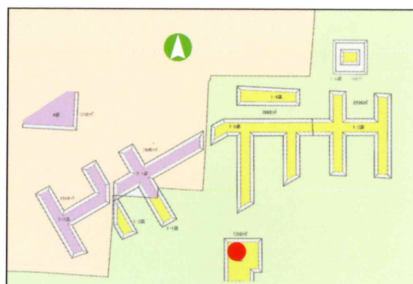
海拔0.3m



●集落の跡



集落跡から見つかった稲を収穫する石庖丁  
長さ4.8cm



弥生時代中期の人々が暮らしていた集落跡も見つかっています。見つかった遺構は掘立柱建物などの柱跡や溝、土坑が中心で、竪穴住居跡などは見つかりませんでした。今回発掘した集落は中心ではなく集落の端に近い部分で、中心は周辺域のいずれかの場所にあるのだらうとみられます。

この集落からは、土坑の中から石庖丁が1点見つかりました。この集落は、前のページの水田を営んでいた人々が暮らしていた集落の一部にあたる可能性が高いものと考えられます。

この集落はそれほど大きなものではありません。この遺跡の南東1.2kmにある拠点集落の雁屋遺跡に従属する集落であったのかもしれませんが。

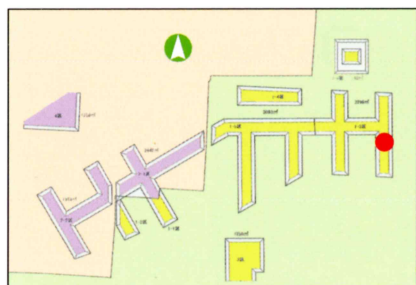




## 弥生時代後期 集落跡 海拔3.2m



●集落の跡



弥生時代後期の集落は、あまり大きくはありませんでしたが、調査区の東端の個所から見つかっています。この集落は、低地の中でも東西方向にのびる土地の高まり（微高地）の上に営まれていて、少しでも住みやすい場所に築かれていました。

見つかったのは土坑や溝などの遺構で、建物跡などは見つかっていません。この集落は遺構の密度も薄く、この場所より西側には弥生時代後期の集落はあまり広がっていないことから、この当時の集落の中心はここから東側に広がっていた可能性があります。



土坑から見つかった高坏 高さ10.4cm



## 古墳時代前期 集落跡

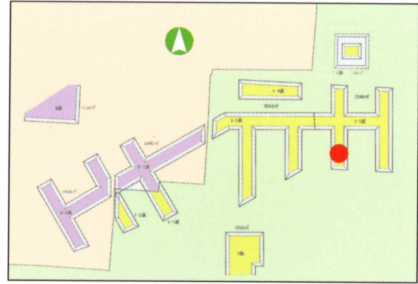
海拔2.7m



●集落跡 柱穴が密集していますが、建物の規模などはまだ確定していません



井戸の底から見つかった土器と木片  
井戸の深さ69.7cm



土坑から見つかった土器 高さ16.7cm

この遺跡には、古墳時代前期（約1750～1600年前）にも集落が営まれていたことがわかりました。古墳時代前期の集落は、東西にのびる土地の高まり（微高地）上に営まれており、建物跡や土坑、井戸などがみわかりました。見つかった集落は遺構が密集しており、何度か建物が立て替えられた可能性があります。

今回見つかった集落は、古墳時代前期の集落としては四條畷市内で初めての発見となりました。古墳時代前期は、全国で巨大な古墳が造られはじめた時期にあたり、日本の国の成り立ちを考える上で重要な時期です。しかし、四條畷市内におけるこの時期の動きは、忍岡古墳が造られたということしかわかっておらず、古墳築造に関わる人々の集落は見つかっていませんでした。

今回の調査で新しく古墳時代前期の集落が見つかったことで、古墳が造られるだけでなく、その周辺に人々が暮らしていたことが分かり、この地域の歴史に新たな1ページが加わりました。

### 忍岡古墳（大阪府指定史跡）



忍岡古墳（前方後円墳）遠望 墳丘全長87m  
古墳の上には忍陵神社が鎮座しています  
地元の方の熱意で覆い屋が建てられ 竪穴式石室が  
見学できます

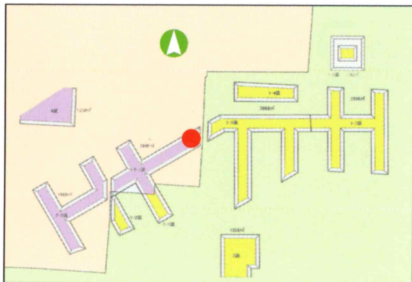
忍岡古墳は、今回の調査地の東約1kmの場所にある、古墳時代前期後半（約1650年前）の前方後円墳です。主体部の竪穴式石室は盗掘されていましたが、昭和9年の京都大学による調査で鍬形石や紡錘車などの石製品や、鉄剣、鉄鎌、小札片などが出土しました。墳丘の規模や残されていた副葬品の内容から、この地域を治めていた有力者の墓であると考えられます。これまで、忍岡古墳の被葬者を支える基盤となった集落は見つかっていませんでした。今回見つかった集落は古墳から約1kmと近い距離にあり、この集落が忍岡古墳の被葬者を経済的にも築造の面でも支えた集落であったと考えられます。



古墳時代中期 祭祀の後片付け 海拔1.4m



●溝のなかに木製品・木片・土器がびっしり



調査地のほぼ中央付近で、南北に流れる溝が見つかりました。その中からは、大量の土器とともに、槽（容器）や剣形木製品などの木製品や、網代、建築部材、木片などが数多く出土しました。

出土した木製品の中に剣形木製品などが含まれており、これらの出土遺物は祭祀で使用されたものである可能性があります。出土した土器は高坏が多く含まれており、供物を神様に奉げるような行為が行われた祭祀で用いられたものと考えられます。一度祭祀で使用したものは、神様に奉げられたものであり、再利用はできないため、祭祀で用いた器物や、その際に建てた祭祀施設などの建築部材を一括して溝の中に片付けたのでしょう。

この溝からは馬の歯も出土しました。この遺跡一带は、古墳時代中期から後期にかけて、渡来系の馬飼いの集落でした。今回の調査地の南隣りにある葦屋北遺跡では、馬1頭がそのまま葬られた墓も見つかっています。この遺跡でも馬の歯が見つかり、それが祭祀用具ばかりが入っていた溝から出土したことは、ここで行われた祭祀が馬に関連するものであったことを示しているといえます。神様に何か供物を奉げるような祭祀が行われたのでしょう。



溝から見つかった土器



溝の中から見つかった馬の歯  
左の歯の長さ8.5cm



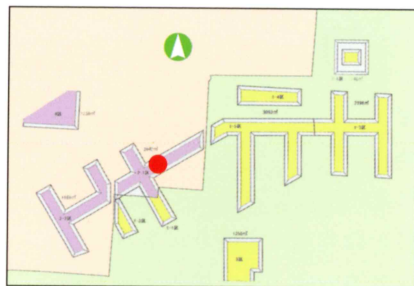
## 古墳時代中期～後期 井戸 海拔1.4m



● 板材を井桁に積んだ井戸 深さ2.2m・井戸枠の高さ1.7m



井戸の中から見つかった土器



古墳時代中期～後期の、木材を組み合わせてしっかりした木枠を組んだ井戸です。上から見るとまさに「井」の字の形になっています。通常、このような形をした井戸は奈良時代以降の井戸に多いのですが、今回出土したのは古墳時代の珍しい例です。

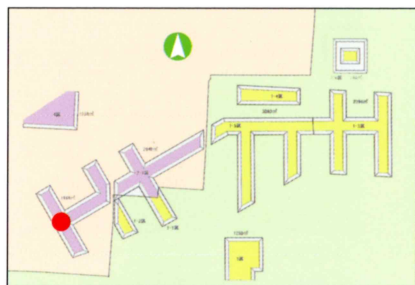
現代でもそうですが、井戸には神様が宿るとされることが多く、井戸を使わなくなる際には井戸の神様を丁重にお祀りしました。その際に神様に奉げられたと考えられる土器がこの井戸の中から出土しました。土器の多くは完全な形のままで井戸の底に入れられていました。これらの土器から、この井戸を使わなくなったのが古墳時代中期であったということが分かりました。



## 古墳時代中期～後期 船をリサイクル 海拔1.7m



- 準構造船をリサイクルして井戸枠に使っています  
井戸の深さ3.2m、船材長さ2.1m



井戸の中から見つかった土器→



準構造船という、外洋にも出ることのできる船の底の板を井戸枠に再利用した井戸も見つかりました。ここでも、井戸を使わなくなるときに井戸の神様へ奉げた土器が見つかっています。

馬は古墳時代中期になって初めて朝鮮半島から日本列島へ輸入されはじめました。この船は、瀬戸内海を通して馬をこの遺跡へと運んできた船なのかもしれません。

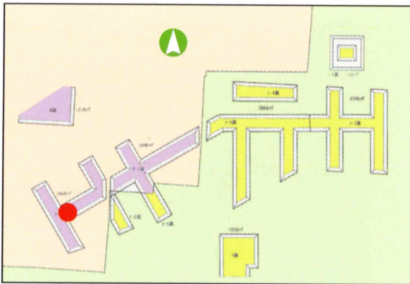


## 古墳時代中期 製塩土器

海拔1.6m



●馬に与える塩を作る容器が多量に廃棄された土坑（穴）1.2m×2.1m



参考資料  
製塩土器（四條畷市中野遺跡）  
高さ8cm

古墳時代中期の土坑からは、塩を作るための土器（製塩土器）が大量に廃棄されているのが見つかりました。馬を育てる際には、塩を与える必要があるため、塩は大量に必要でした。馬のランクによって与える塩の量にも差があり、良い馬ほどより多くの塩が必要でした。これらの土器は、馬に与えるための塩を作った土器をまとめて捨てたものと考えられます。





## 古墳時代中期～後期 玉類



- 滑石製子持ち勾玉、
- 印からも出土 長さ6.4cm



- 滑石製品 上段：有孔円盤。  
下段：左2点紡錘車、  
右：作りかけの紡錘車 高さ4.4cm

古墳時代の集落域の各所から、様々な玉類が見つかっています。子持ち勾玉は2点出土しています。勾玉の子どもが付いていると考えられたことから、こう呼ばれています。

剣形石製品は、一見あまり剣らしくないですが、きれいに刃があるような形に作ってあります。

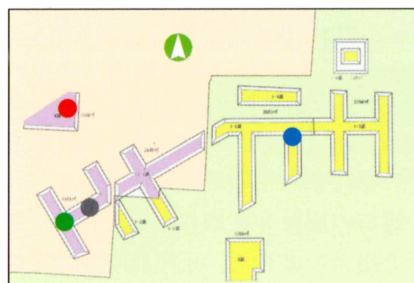
糸紡ぎに使う紡錘車の作りかけのものは、上下に二つ繋がったままの状態でした。遺跡の付近で玉類を製作していた可能性があります。おそらく上の部分が欠けたので捨ててしまったのでしょう。紡錘車をどのようにして製作していたのかが分かります。



- 滑石製剣形石製品
- 長さ6.6cm



- 滑石製紡錘車
- 直径4.3cm





## 古墳時代中期～後期 水田跡

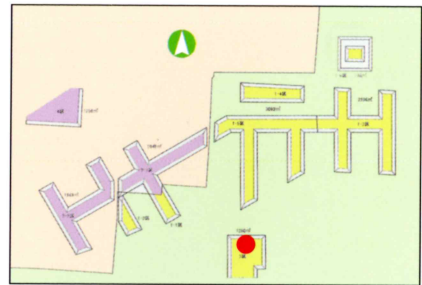
海拔1.2m



●水田の堤防と水路 水田1区画の面積約74㎡～146㎡。  
溝の最大幅5m。○印が木製槽（下の写真）



水路から見つかった木製槽（容器）  
25.6cm×59.3cm



古墳時代の水田には、水を供給するための水路が作っており、水があふれないよう両側は土を盛り上げて堤防が作り上げられていました。堤防は洪水により何度も決壊し、そのたびに土を入れなおして堤防を補修していたことがわかりました。堤防の両側を杭で囲い、そこに木材を添えることで堤防が切れないように強化されていました。それに使われた材の中には再利用されたものも多く、建物の扉材も含まれていました。水路からは木製の槽（容器）がほぼ完全な形で出土しました。水田はその水路に沿って四角形に区画されていて、大きいものでは一辺10m以上ありました。



## 古墳時代後期 水田跡

海拔1.7m



●水田の跡 1区画約31㎡～136㎡



古墳時代後期の水田は、洪水によって運ばれた砂にパックされていたため非常に残りがよく、当時の人の足跡や、水田を耕す農具の跡、稲の根株の跡まで残っていました。足跡の中には歩幅がわかるものもありました。足跡を掘ると、足の指の跡まで残っていたほか、土踏まずがしっかり残っていました。当時の人々は裸足で水田を歩いていたようです。



水田跡に残された古墳時代人の足跡  
手前の足跡の長さ23.3cm、歩幅52.4cm

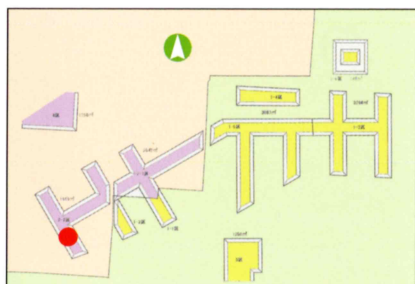


## 古墳時代後期 竪穴住居跡

海拔1.6m



● 竪穴住居群 1住居あたり31㎡



住居のカマド跡 住居の端に設けられ、煙が屋外に排出する機能的な構造です

古墳時代後期の竪穴住居跡が調査区の西端などで見つかりました。見つかった住居は複数あり、その中にはカマドの跡が良好に残っているものもありました。カマドを作るのは朝鮮半島からもたらされた技術であり、ここにも馬をもたらし渡来人との交流が見て取れます。

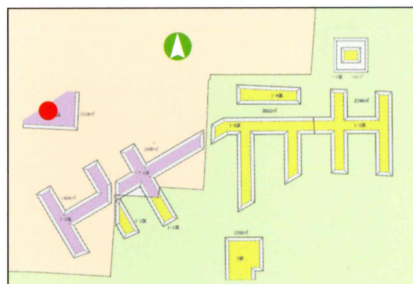
集落はここでも土地の高まり（微高地）上に営まれていました。当時の人々は、水辺の低い土地の中にもわずかな土地の高まりを見出し、そこに集落を築いていたことがわかりました。



●掘立柱建物跡 ●印の柱穴には柱が残っていました



●柱の下に板が設置されています



古墳時代後期の集落からは、竪穴住居跡だけでなく掘立柱建物跡も見つかりました。建物は4.7m×4.2mの大きさで、2間×3間の規模のものでした。柱穴の中には、柱が残っていたものもあり、柱の底には板を設置して柱が沈み込まないように工夫されていました。

この建物もやはり当時の土地の高まり（微高地）上にありました。少しでも高い土地で、少しでも建物の床を高く上げて湿気を防いでいたのでしょう。



## 飛鳥～奈良時代 鏡の祭祀 海拔2.1m



●海獣葡萄鏡 鏡面（直径3.9cm）

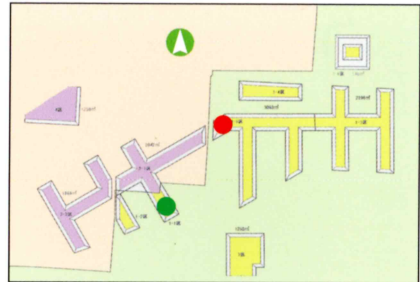
奈良時代の<sup>かいじゅうぶどうきょう</sup>海獣葡萄鏡が、現在の地表面より1.9m掘り下げた位置で鏡面を上にして出土しました。鏡が出土したのは中世以降に土地の高まり（微高地）が削られた場所で、奈良時代の集落が広がっていた可能性が高い場所です。

### ●飛鳥時代の水田跡 一区画約46㎡



鏡が出土したのとは別の場所で、飛鳥時代の水田も見つかっています。海拔1.6mの場所です。この時には条里制がまだ施行されていなかったようで、土地の傾斜に合わせた形の水田でした。しかし周辺の調査では奈良時代にこの地域で早くから条里制が施行されていたことがわかっています。

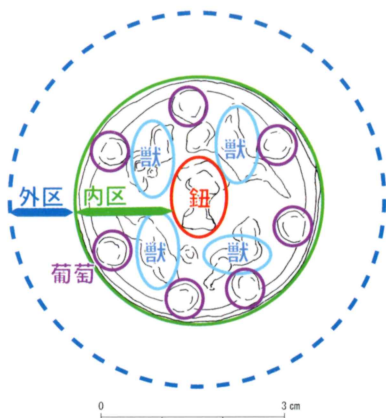
（条里制のことは25頁参照）



この鏡は、奈良時代に都の進んだ制度を施行させた有力者が祭祀に使用した鏡と考えられます。

奈良時代に都で行われた祭祀の広がりを考える上で全国でも重要な資料と考えられます。

この鏡は、海獣葡萄鏡という種類で、直径3.9cmあります。中央に鈕ちゆうと呼ばれるつまみのようなものがあり、そこに鈕孔ちゆうこうという紐を通すための孔が設けてあります。



この鏡の特徴は直径が小さい点です。この鏡を作る見本となった鏡にあった外側の区画（外区）をこの鏡では削除して、内側の区画（内区）部分だけの鏡として鑄造されています。

海獣葡萄鏡という名称は、鈕の周りに獣が四匹描いてあることと、その外側にある小さい珠点しゅてんが葡萄の文様であることによります。

内区部分だけの小型海獣葡萄鏡は、これまでに全国で11点見つかっています。そのうち7点は藤原京や平城京など都があった奈良県での出土で、大阪府下では初の出土です。なお、外区がある小型の鏡は東大阪市の西ノ辻遺跡などで出土しています。

この鏡は日本列島で鑄造した製品と考えられます。このような内区部分だけの鏡は、鏡面等を研磨せず、鑄造したままの状態での出土することが多く、祭祀専用の鏡として作られた可能性が高いと思われます。



●海獣葡萄鏡 裏面（鏡背）実物大



●海獣葡萄鏡



## 平安時代 銅銭を使うお祀り 海拔3.2m



●土師器皿と一緒に、皇朝十二銭の延喜通宝が出土（○印）



延喜通宝 直径2.0cm



平安時代の溝からは、皇朝十二銭こうちゅうじゅうにの11番目にあたる延喜通宝8枚が、せん数多くの土師器皿と一緒に見つかりました。この銅銭は紐でつなげられていたと考えられる状態で見つかりました。水の神様に一括で奉げたものと考えられます。







○は前頁の銅銭8枚、○は緑釉をかけた陶器、  
 ○は富寿神宝が出土した場所

平安時代に掘られた  
 穴からは、高級品の緑  
 釉陶器や灰釉陶器、そ  
 して皇朝十二銭の5番  
 目の富寿神宝が見つかり  
 ました。これらはこの  
 遺跡が単なる集落で  
 はなく、社寺もしくは  
 役所に関する人々が  
 暮らしていた可能性が  
 高いことを示していま  
 す。



●緑釉をかけた陶器



●皇朝十二銭の富寿神宝 直径2.3cm

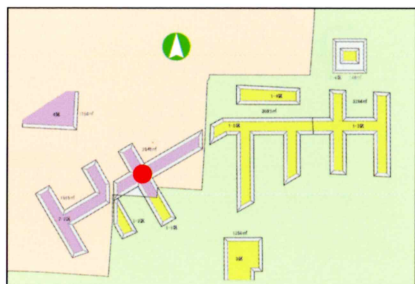
奈良～平安時代につくられた銅銭（皇朝十二銭）			
銭のなまえ	つくられた年	銭のなまえ	つくられた年
1. 和同開珎 <small>わどうかいちん(ほう)</small>	708年	7. 長年大宝 <small>ちやうねんたいほう</small>	848年
2. 万年通宝 <small>まんねんつうほう</small>	760年	8. 饒益神宝 <small>じやうやくしんほう</small>	859年
3. 神功開宝 <small>じんぐうかいほう</small>	765年	9. 貞観永宝 <small>じやうがんえいほう</small>	870年
4. 隆平永宝 <small>りゅうへいえいほう</small>	796年	10. 寛平大宝 <small>かんぺいだいほう</small>	890年
5. 富寿神宝 <small>ふじゆしんほう</small>	818年	11. 延喜通宝 <small>えんぎつうほう</small>	907年
6. 承和昌宝 <small>じやうわしやうほう</small>	835年	12. 乾元大宝 <small>けんげんたいほう</small>	958年



## 平安時代 水田跡 海拔1.7m



●アゼをはさんで右が二坪、左が三坪の水田の跡 アゼの幅1.5m

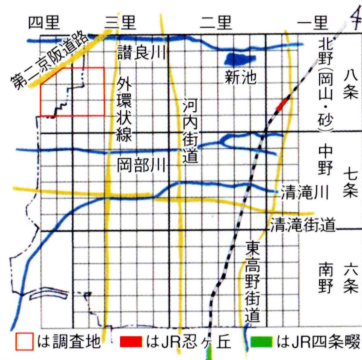


条里制の水田の大きな区画を分ける東西方向の坪境のアゼ（畦畔）が見つかりました。このアゼは幅1.5m、高さ0.2mあり、他の水田のアゼとは異なるしっかりした作りです。この坪境のアゼは、市史の第一巻で文献上の記録から想定されていた通りの場所から見つかりました。文献の記録と考古学の発掘成果とが一致した重要な例です。

### 条里制とは

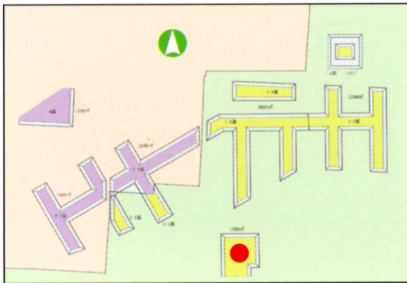
奈良時代から施行された土地を東西南北に区画する制度です。一辺約109mで正方形に区画されます。これが一坪で、36坪で一条一里となり、それが集まって条里制の地割となります。遺跡の周辺では奈良時代に早くからこの条里制が施行されていたことが分かっています。

調査地は八条三里から四里にあたります。今回見つかった坪境のアゼは八条四里の二坪と三坪の境目のアゼとなります。





● 鎌倉時代の集落 おびただしい数の柱穴が見つかりました



● 集落の土坑から出土した土師器皿

平安時代から鎌倉時代にかけての集落は、一番南側の調査区で見つかりました。この時期には、その調査区の中央を東西に川が流れ、その南側のやや高い土地（微高地）に人々が暮らしていたことがわかりました。集落ではおびただしい数の柱穴が見つかり、当時使われていた土器や銅銭などが出土して、人々が何度も建物を建て替えながら暮らし続けていたことがわかりました。

このように遺構が密集しているのは、この場所が水も得やすく暮らしやすい場所であったか、あるいは水田等に近く重要な場所だったかのどちらかだと考えられます。



## 平安～鎌倉時代 井戸4基 海拔3.2m



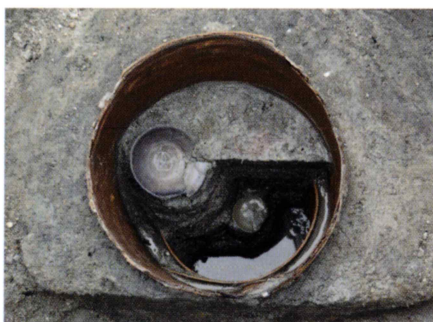
● 曲物を4段以上積んだ井戸 深さ1.5m



● 瓦器碗が出土した井戸 深さ1m

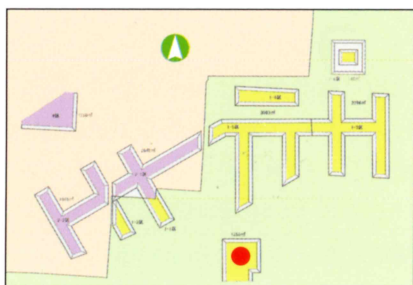


● 曲物を積んだ上に板枠井戸 深さ1.2m



● 瓦器碗が出土した井戸 深さ1.2m

平安時代から鎌倉時代にかけての集落からは、井戸が多く見つかりました。それぞれ作り方が違って、周辺の状況や手に入った材料にあわせて井戸の作り方を変えていたことがわかります。





鎌倉～室町時代 井戸2基 海拔3.1m



●板を縦に組んだ井戸1 深さ1.7m



左の井戸の中から見つかった漆塗り椀



●板を縦に組んだ井戸2 深さ1.8m



左の井戸の中から見つかった漆塗り椀・皿  
(下の写真)



鎌倉時代から室町時代の井戸では、どの井戸からも漆器が見つかりました。この2基の井戸は板を縦に組み合わせた構造で深さもそれまでより深く、井戸を掘る技術が進歩していたことがうかがえます。



## 讚良郡条里遺跡のその後

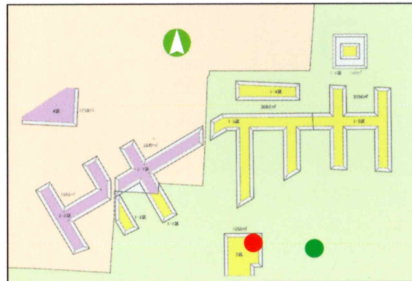


整地した調査直前の様子 平成23年撮影

調査前は30分に見られるように田んぼの風景が広がっていました。上部中央の小さな森は大將軍社跡で、明治時代に調査地の東1kmにある忍陵神社（忍岡古墳）に合祀されました。建立年代は不明です。



●愛くるしい犬（高さ3.4cm、土製）江戸時代



●は大將軍社跡

室町時代以降も、この地には人々が住み続けます。いつごろからなのか定かではありませんが、この地には大將軍社という神社があって、人々の信仰を集めました。明治時代になって忍陵神社へ合祀されましたが、神社のあった場所は小さな高まりのままで開墾されることなく残っていました。

遺跡では江戸時代にもそれ以前と同様に引き続き水田が営まれていたようです。江戸時代の耕作用の大井戸からは犬の形をした小さな土製の人形が見つかりました。このような人形は大坂城の発掘調査などでも見つかっています。当時の人々の遊びを垣間見ることができます。



## そして現代へ



調査前の写真（赤線内が調査地）

今回の調査地では、上の写真でもわかるように発掘調査に入る直前まで大部分で水田や畑が営まれていました。発掘調査中にも、前年の株から生えてきた稲が成長し、穂をつける様子を見ることができました。

讃良郡条里遺跡では、このように弥生時代から現代まで、途切れることなく人々の営みが続いてきました。そのうちの大部分の時期は水田が営まれ、高まりには集落が作られたこともありました。人々は水辺に暮らし、さまざまな祀りごとを行ってきました。

発掘調査成果の中には、弥生時代前期の水田や、古墳時代前期の集落、小型の海獣葡萄鏡の出土など、周辺では初めて見つかったようなものも含まれていました。

今後、この遺跡は開発されていきますが、それは人々の営みが続いているということのあらわれでもあります。これからも、こうした人々の営みは続いていき、歴史が築き上げられていくことでしょう。

今回、まだ発掘調査途中という状況ではありますが、これまでに分かってきた事柄を展示でお示しすることができました。今後も、讃良郡条里遺跡の調査成果に、注目していただけたらと思います。



2012